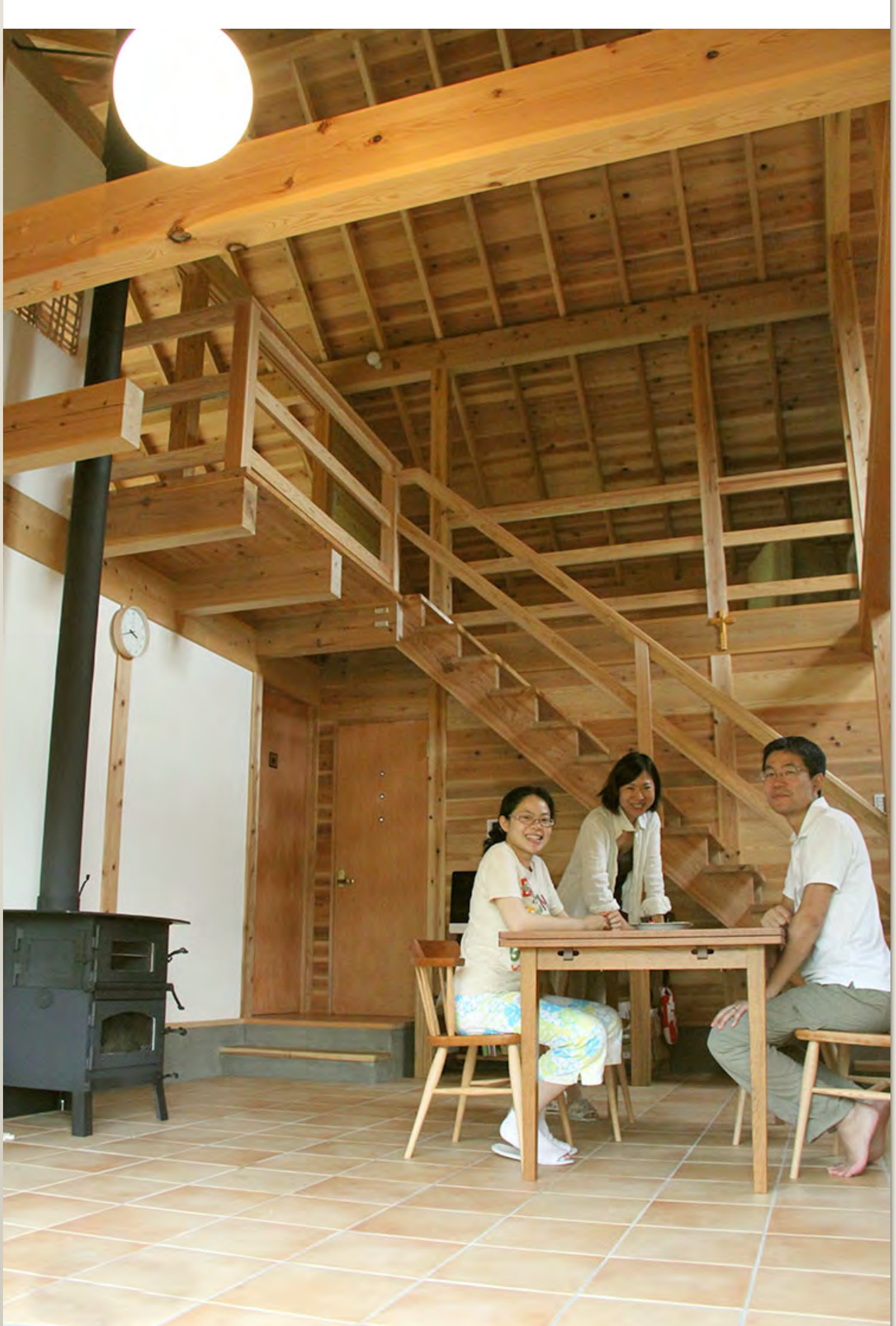
ストゥディオ・プラナ
Studio PRANA
林 美樹さん
職人がつくる木と土壁の家

林美樹さん（中央）と、日高の家の建て主さんご夫婦

1 2 3

Like 0　ポスト

緑豊かな埼玉県西部。ストゥディオ・プラナの林美樹さんが設計した「日高の家」を訪ねました。シンプルで大らかな木と土壁の家です。建て主の矢島尚登さんとイーウェンさんは、お子さんが生まれたばかりの若いご夫婦で、奥様はシンガポールの方です。ふだんは奥様も保育園にお子さんを預けて働いていらっしゃいますが、土曜日の午後、ご家族が揃って、迎えてくださいました。入っていきなり吹き抜けの大空間が開放的で気持ちのいい、おうちです。



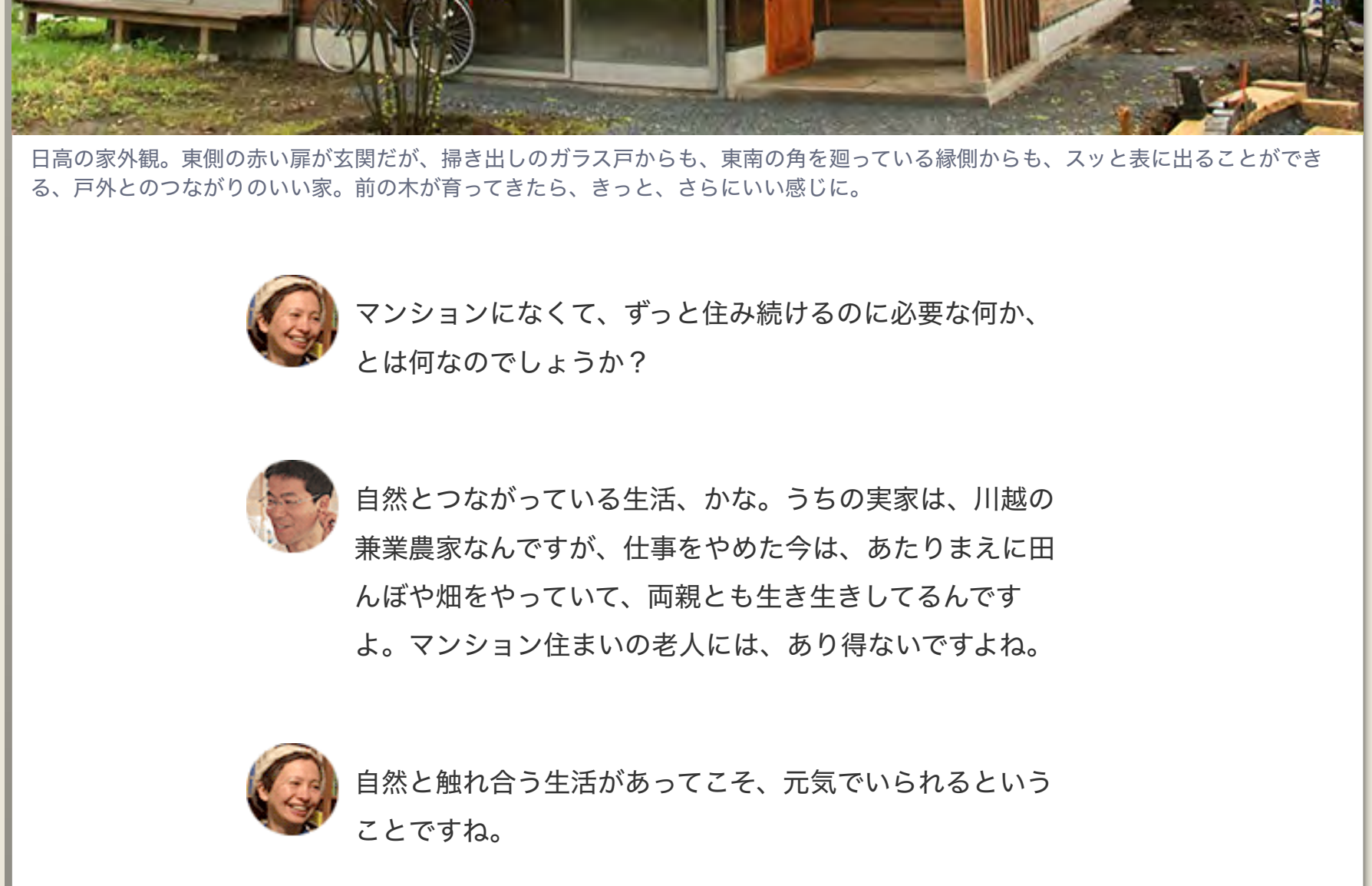
矢島さんが見つけて来たイタリアのテラコッタタイルを貼った床から天井裏まで、全体が大きな吹き抜けとなったリビングダイニング。杉材とタイルの色の相性もなかなか。

（木の家ネット・ヨハナ）この家はどういうきっかけで建てられたのですか？

（矢島尚登さん）彼女と結婚するのに、家を持つというのがシンガポールの両親の条件だったので、それで家をどうするかを考え始めました。

（イーウェンさん）シンガポールは中国系、マレー系、インド系、イギリス系など、多くの人が集まって主に商売をしている小さな国で、国全体が都会です。ほどんどの人はマンション住まいですから、私はマンションでもよかったんですけどね。

けれど、家を持つとなれば、一生のことですからね。仕事しているうちは、うちに帰って寝るだけですから、便利でありさえすればそれでいいのかも、けれど、その先もずーっと住み続けるのに、本当にそれでいいのかなと疑問で、僕は最初から一戸建で、場所をどこにするかを考えていました。



日高の家外観。東側の赤い扉が玄関だが、掃き出しのガラス戸からも、東南の角を廻っている縁側からも、スッと表に出ることができる、戸外とのつながりのいい家。前の木が育ってきたら、きっと、さらにいい感じに。

マンションになくて、ずっと住み続けるのに必要な何か、とは何なのでしょうか？

自然とつながっている生活、かな。うちの実家は、川越の兼業農家なんですが、仕事をやめた今は、あたりまえに田んぼや畑をやっていて、両親とも生き生きしてるんですよ。マンション住まいの老人には、あり得ないですよね。

自然と触れ合う生活があってこそ、元気でいられるということですね。

私には、その感覚はよく分からないです。シンガポールでは、自然といえばジャングルか、たまにリゾートで遊びに行く南の島ぐらいで、日常的な自然とのつながりというのはないですからね。日本の方が、自然と人とが近いのかもしれない。

日本でも、マンション育ちで田舎のない家庭で子ども時代を過ごしたら、そうかもしれないですよ。尚登さんには、子どもの頃の原体験があるのでしょうか？

そうですね。今でこそ、川越でも田んぼは大分減っていますけれど、小さい頃は、近くの用水路にホタルがいて、おばあさんがよく見に連れていってくれました。

西側の2階妻面に大きく開いた窓からは、裏山が手の届きそうな距離。２階は、将来、部屋に区切って使うこともできるような間取りになっている。

となりのトトロみたい！ 私には、映画の世界です。

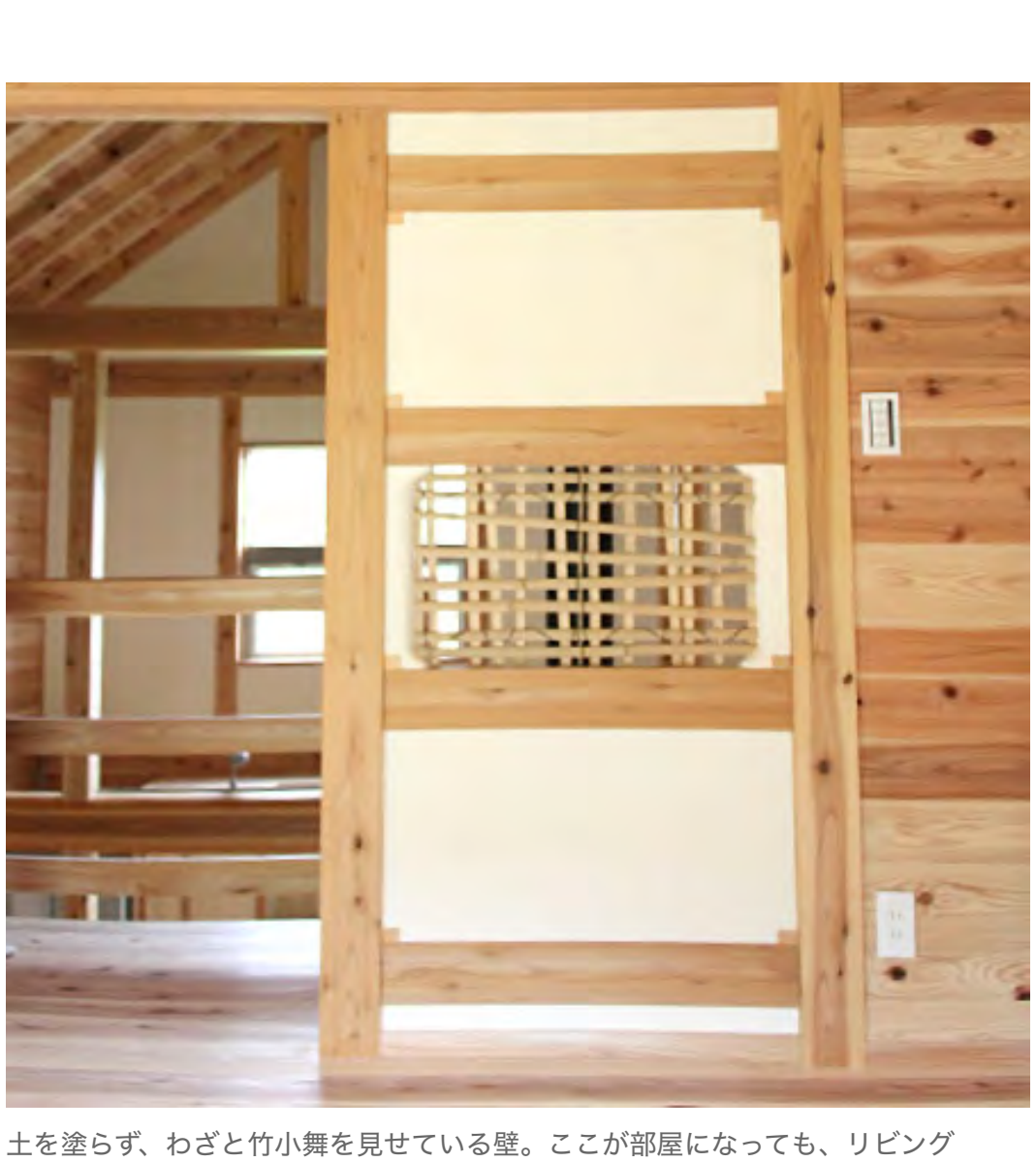
子どもにもそういう体験が日常的にあった方がいいなと思うし、そう考えると、庭いじりや家庭菜園ぐらいはできる暮らしは老後になってからでなく、今から始めておくべきだなと。

家をもつ、ということで、長いスパンでの暮らしのイメージがはっきりされたんですね。

家をもつことになるまでは、意識したこともなかったことが出て来て、自分でも意外でしたけどね。

で、家を手に入れる第一歩として、ハウスメーカーの展示場に行ったりはされたのですか？

行きませんでした。外の世界と家の中をすっかり遮断して、高気密高断熱で一年じゅう快適です、って言うんだけれど、なんか違うなーと。



土を塗らず、わざと竹小舞を見せている壁。ここが部屋になっても、リビングの気配が分かるようにという美樹さんの心配りと、左官の遊び心とが合わさってこうなった。

「なんか違う」とは、もう少し掘り下げると、どんな感じなのでしょうか？

自然とつながってる感じがしないんですよね。自分にとって住み心地のいい家ってなんだろう？って、考えていったら、締め切って機械で温度調節する快適さではなく、多少は夏は暑かったり、冬は寒かったりしてもいいから、風が入る、日があたるという家の方がいいなと。で、風の抜ける家でゴロゴロしたり、日あたりのいい縁側でおやつ食べたり、そんなイメージで作ってくれる設計士さんにお願いしよう、という方向でネットなどで設計士さんを探し始めました。

私自身は縁側は知らないけれど、ドラマとかで縁側のところで座って近所の人と話したりする感じは、いいなと思いましたよ。

縁がなく、目の詰まった半畳の琉球畳が市松模様に敷き詰められた和室。美樹さんお得意の割り付けデザインで建具職の新井さんに特注で作ってもらった障子の外側には濡れ縁があります。

いろいろネットで探していくうちに、長く住むことを考えたら、無垢の木の家だったら年々味が出てくるし、飽きないでいいかな、ということも思うようになりました。

忙しく仕事して帰ってくる家に、はーっとひと息つけるリラックスの感じ、私は虫はキライだけど、それでも自然と触れ合う感じがあるのには、賛成でした。

で、ネットで「無垢の木の家」で検索して、いろいろ比較検討をして、何人かの設計士さんに会ってみたりもしました。

大分、絞られてきましたね！で、最終的に林美樹さんに辿りついたのは？

無垢の木の家でも、柱をドーンと見せるような「こだわりの伝統構法」も嫌いではないのですが、ホームページで林美樹さんの作品を見た時に、現代の生活に合ったデザイン性があるのがいいな、と思いました。

キッチン脇の土壁が朱く塗られているのは、イーウェンさんの提案でした。いいアクセントになっています。

木の家というと日本のものというイメージがありますが、あまり和風過ぎない感じが、私にもちょうどいいです。

尚登さんがご自身の感覚に忠実に、ぶれないで考えたり調べたりしていく中で、出会えたんですね。イーウェンさんも気に入られているようで、よかったです！

ご飯を作ったり、食べたり、寛いだり、パソコンをちょっといじったりという生活スペースは、吹き抜けのワンルームにしましたが、床は昔の民家の土間のイメージで、テラコッタタイルにしました。彼女の生活習慣のもそれが合うようです。

階段上の踊り場からリビングダイニングを見下ろす

シンガポールはテーブルと椅子の生活で、床は木でなくてタイルです。掃除もしやすくていいです。休んだり、子どもとゴロゴロ遊んだりするところは、畳で座ったり寝っころがって、立ち働くところはタイルで、と、どちらもとてもいいです！

彼女の両親もシンガポールから泊まりに来て、気に入ってくれました。

来るまでは、そんなに木を使っていて、湿気で家が腐らない？カビたりしない？と心配していましたが、日本に来てみて納得したみたいです。畳の部屋や、外の緑を見ながら入るお風呂が旅館みたいで気持ちいいねと言われましたよ。

よかったですね！お子さんがこんなに素敵な家で、まわりの自然とも触れ合いながら成長していかれるのが、楽しみですね。

Like 0　ポスト

1 2 3

木の家イベントカレンダー

最近の特集記事
2019年6月15日 やさしくて強い、理想の家を求めて：アイ設計研究室　大前泰秀さん
2019年5月15日 磨き上げた職人技で、木を生かす：西岡建築一級建築士事務所　西岡健一さん
2019年4月20日 大工と左官の職人プロジェクトチーム 総合建築植田 植田俊彦さん 俊司さん
2019年4月10日 本物の家づくりを、自由に、楽しんで：株式会社木神楽　高橋一浩さん
2019年1月5日 新春特集 2018年のベストショット集
2018年12月29日 板倉仮設住宅 移設ものがたり part3 大工の声＆今後の課題編
2018年12月17日 板倉仮設住宅 移設ものがたり part2 実録編
2018年12月14日 板倉仮設住宅 移設ものがたり part1 概要編
2018年9月4日 番匠 剱持工務店 副棟梁・剱持大輔さん
2018年8月15日 鶴岡総会予告 その１　散るより、生き延びよ！

人気のある記事
伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！ 18件のビュー
家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ 15件のビュー
設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家 10件のビュー
工務店・小田貴之さん（オダ工務店）：木の家づくりのプロデューサー 8件のビュー
サツキとメイと私の家：愛・地球博レポート 5件のビュー
家にお風呂が入るまで 5件のビュー
無くなっては困る！刻み用電動工具：込み栓角ノミを復活させるためのアクション 5件のビュー
日本人の暮らしと木 4件のビュー
込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記 4件のビュー
番匠 剱持工務店 副棟梁・剱持大輔さん 3件のビュー

この記事のタグ
大工以外の職人たち
木の家の暮らしと子育て

同じタグがついた別の記事
2010年6月30日 土壁の魅力
2016年8月2日 込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記
2010年7月28日 きらくなたてものやチーム：家づくりを自分の手に！
2006年9月1日 道具と大工
2015年9月15日 里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

関連する記事はこちら

きらくなたてものやチーム：家づくりを自分の手に！

里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

漆職人・小林広幸さん(春野屋漆器工房)：木の家づくりにも関わる漆塗り職人を訪ねて

大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

設計士・古川保さん(古川設計室)：木の家づくりは仕組みづくり

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島舎内
mail： jimukyoku@kino-ie.net
tel： 086-486-5464

ストゥディオ・プラナ
Studio PRANA
林 美樹さん
職人がつくる木と土壁の家

1 2 3

Like 0　ポスト

伝統的な木組み土壁の家でありながら、現代の生活に合った、デザイン性のある家づくりをする美樹さん。シンプルで、余計なものない。かといって、ぶっきらぼうではなく、洗練されていて、さりげない遊び心やあたたかみも感じられる。何気ないおしゃべりから、そんな作風につながる林美樹さんのお人柄を感じていただければと思います。

赤城の山荘。父の設計したものの中でも、好きな建物のうちの一つです。

「時を経た、いい感じ」が好き

時間が経って、いい感じに古びて、まわりの木も育って、住まい手の暮らしがにじみだしてくるような・・そんな家が好き。どうってことない建物でも、丁寧に使われると、時間が経った方がステキになると思います。学生時代から、人のいない、家具もない、ピカピカした建築写真って、なんか違うなあって思っていました。

アルバムの中の一枚。左が幼い頃の私。ダイニングテーブで朝ご飯を食べています。

家をあれこれ改修し続ける両親

両親とも建築設計関係の仕事をしていて、祖父母の敷地に建てた９坪２階建ての小さな自宅は、二人の研究材料のようなものでした。父は「ここに絵をかけたいから壁にする」、母は「そこは窓！」なんて言い合いながら、私たちの成長に合わせてよく家をいじっていたので、しょっちゅう出入りの大工さんが来てました。庭で鉋で削ってるのをずっと眺めていたり…。あの木の匂い好きだったなあ。

「らしく」仕上げるインテリア設計には向かない私です

親と同じ設計の道を選んだからよけいに、親のスネをかじりたくないという思いがあって、ちゃんとお勤めしようと、日本設計に行きました。その当時、女子は建築設計部には入れてもらえなくて、所属は新設のインテリア設計部。バブル最盛期の仕事で、お金をかけて表面を「らしく」お化粧するとか、目新しさを出して差別化するというようなことばっかり。その上、何年かすればすぐにリニューアルされてしまいます。やっぱり時を経てよくなっていくのは本物だけ。そのような本物の魅力に惹かれるし、そんなものづくりを私もしたいと思っています。

愛猫、ぐらと寅次郎

猫の居る暮らし

二匹、猫が居ます。のびやかで、気ままで、自分のしたくないことはしない、そんな猫が、大好きです。そして、ポイントは、人間の思い通りにはなかなか動いてくれない、ということ。思い通りにならない、会話も成立しない相手のことをああかな、こうかな、と思いながらコミュニケーションする、というのは、想像力をうんと伸ばすと思うんですよ。相手が猫であれば、なおさらです。あと、猫は正直で（ずる）賢い！暑い時、寒い時、言われなくても自分にとって気持ちのいい場所を上手に見つけて寛いでいる。本人たちは気づいてないけれど「温熱環境チェッカー」の役目も果たしてくれてもいるのです。猫が寛ぐコーナーがたくさんある家になっていれば「よしっ、いいぞ」と、ひそかに満足！

イタリアで学んだこと

日本設計に居た頃、自主研修制度を使って休職して、イタリアの大学の建築学科に通いました。二年間、グラッパ山が見える風光明媚なところで、設計の課題をやったり、建築史の授業に出たり。当時は著名な建築史家のタフーリ教授が教鞭をとっていました。そこで一番心に残ったのは、歴史観の違い。新築でもその場所の歴史的背景を徹底的に調べた上で、だったら今どう作る、将来どういうものとして残るかを考える、というのがあたりまえなのには、驚きました。イタリアでは新築でもいい意味で「目立たない」、風景や歴史に融け込んだようなものが一般に評価されているように感じます。隣との違いを個性？として主張するのとは、大違いです。

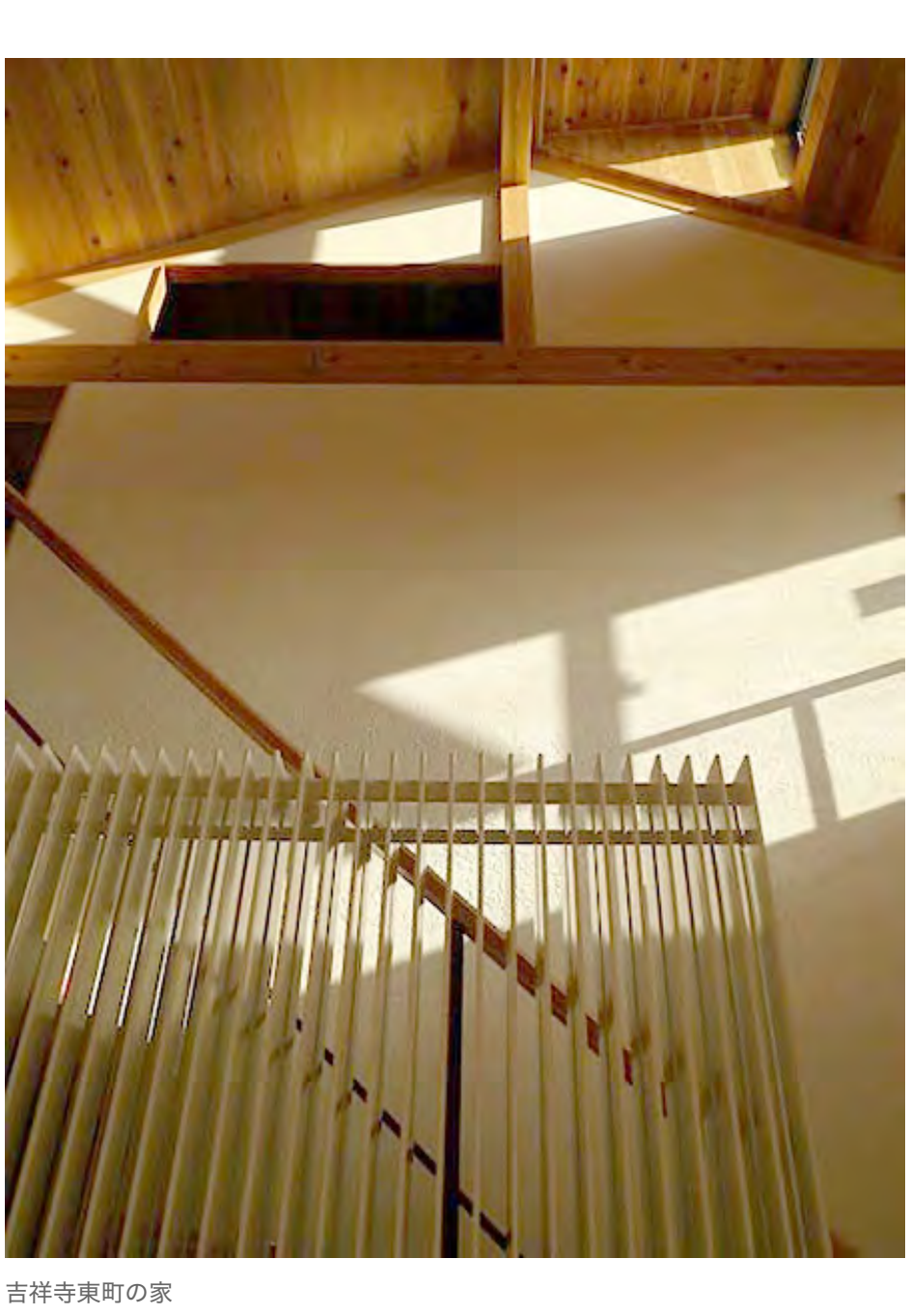
作って食べること。きれいに盛ること。

食べることもですが、料理が大好きで、時間に余裕があったイタリアでは、使ったことのない食材を買ってはいろいろと試していました。今では、その頃より忙しいですけど、平日のお昼も事務所で簡単なものを自炊するよう、心がけています。季節の素材を取り入れて、ちょこちょこっと作ります。そうやっていただくご飯で、スタッフたちと午後を乗り切ります。特別なおもてなしでなくても、食器は事務所にある、そう多くはない器の中から選び、盛りつけにもちょっと気を使っています。見た目が美しいことも、食事の楽しさのひとつですから。

修道院をリノベーションした美術館 Musei Civici Eremitani

日本でも、イタリアでも、あたりまえなこと

イタリアでは、あたりまえに古い建物を大事にしているし、それを今の生活に活用しようということをしています。私が今、日本で伝統的な手法に学んだ家づくりをしているのも、なにも特別なことではなく、そのあたりまえの感覚の延長にあるものです。身近な材料を使うこと、気候風土に合っていること、シンプルであること、機械や工業製品に頼らず自然であることは、世界どこでも、その土地に根ざした建築に共通していることではないでしょうか。イタリアまで行って学んだのは、実はそんな基本的なことだったのか…という感じですが、今の日本が一番忘れてしまっていることなのではないでしょうか。


吉祥寺東町の家

ゆるやかな暮らしの器

で、私の作る家は？ と問われれば、建て主さんのお話を訊いて、こう暮らしたいんだな、とキャッチしたことを、かたちにすることではないかと。心がけているのは、作り込み過ぎないこと。今のご家族の状況や好みに合わせてきっちり作り込んでいくと、将来の家族構成や嗜好の変化についていけなくなるからです。長く住むことを考えれば、家はあっさりとした、ゆるやかな器でいいと思っています。味付けは、建て主さんの住みこなしで！日本の家は、昔からそんな感じだったんじゃないでしょうか。

南葉山の家。林野庁のDVD用撮影取材がはいった時の一枚。

納得して進んでいただけるよう心がけていること

とはいえ、建て主さんは一生に一回の家づくりですから、いろいろとこだわられることもあります。ここはこうしてほしいとか、これを使いたいとか。そのようなご要望には、なるべく添うようにはするのですが、全体のバランスを考えてどうかな、とか、家族構成が変わった後の事まで考えてどうかな、と思う場合もありますよね。そんな時は、どうしてそうしない方がいいのか、どう考えたらいいのか、ということを納得の上軌道修正できるよう、いっしょに考えるようにしています。「それは違います」と、ズバっというよりまわり道のようですが、そちらの方が最終的には良い結果となるようです。

大工の都倉さんとの出会い

イタリアから帰り独立して、住宅設計を手がけるようになった一軒めで、伝統構法に熱意をもっている大工の都倉さんと出会えたのは幸せなことでした。自分が描いていたことを、木を使って実際のカタチにしてくれる、という手応えがあり、教えられることばかりでした。仕事ぶりももちろんですが、印半纏を着ている都倉さんは、職人気質でキマっています。（笑）腕だけでなく人柄も素晴らしいので、お施主さんの受けも抜群。以来、都内や近郊の仕事の場合は、都倉さんと組んで仕事させていただいています。

大工の都倉さん、左官の江原さん

ひとりでは、できない。チームだから、できる。

杉材で家の骨組みを作り、竹で小舞を編んで土の壁をつけ、開口部には木製建具が入る、というのが私の家づくりの定石ですが、それができるのも、ベストメンバーのチームがあってこそ。その代表メンバーが、大工の都倉さん、左官の江原さん、建具の新井さん。私が「こんな風にしたいな」と描くものを、具体的に実現してくれるのは、この３人です。投げかけると、どんどんいいアイデアを出してくれるので、細かいところまで悩みすぎずに現場で相談することにしています。おもしろいのは、３人であれこれと調整しはじめて、どんどん話が弾んで、思わぬ方に広がっていくこと。これぞ現場の醍醐味！もちろん、その他の職人さんたちも、気心の知れたいい人ばかり。ほんとにいいチームに恵まれて、幸せです。

京都、宝泉院

高気密高断熱？

外の環境と室内とを遮断するハコを作ってその内部を高効率エアコンで空調するのが省エネで快適な住まいであるという高気密高断熱の考え方は、どうもしっくりきません。季節を問わず一年中同じような、そしてさらに、家の中の隅々までが均一な温度に保たれていなければならない、ということが必須だとは思えないからです。しのげないほどでなければ、多少の暑さ寒さは季節感として楽しめばいいし、それくらいの方が、むしろ身体の体温調節機能を活性化させるはずです。冬も、家の中に多少寒いところがある方が、食品の保存などにもいいのではないでしょうか。

都倉さん作の茶杓

茶道に学ぶこと

お茶のお稽古には今も通っています。茶の湯はまさに、季節の変化を味わう日本の文化です。亭主は客に、暑い時には涼しさを、寒い時には温かさをどのように演出するか、心を配ります。暮らしの中のそのような知恵は、まさに風土に育まれて来た文化といえるのではないでしょうか。シンプルな空間や丁寧に手づくりされたものへの尊敬の念も、茶道ではとても大切にしています。あと、お茶をやっている人同士の間で、何か通じ合うような部分ってありますよね。いっしょに家づくりをしているチームメンバーの３人は、実はそれぞれお茶をやっていて、偶然のような、いや、知らず知らずのうちに惹かれるところがあったのかもしれません。

日高の家

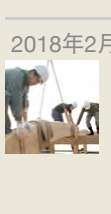
ほどほどが、ちょうどいい、そんな家

風通しをよくして、お日様の恵みを十分に取り入れたり遮った

木の家イベントカレンダー

最近の特集記事

2018年3月27日
伝統建築に携わるすべての職人に光を


2018年2月7日
「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」ユネスコ無形文化遺産候補選定のおしらせ

2018年1月2日
新春特別企画 2017年のベストショット

2017年12月14日
第17期木の家ネット総会：倉敷大会 - 民家改修と曳家-

2017年10月14日
気候風土適応住宅のチラシができました！

2017年9月4日
家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ

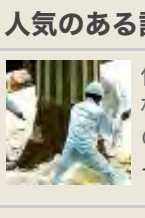
2017年8月8日
家にお風呂が入るまで

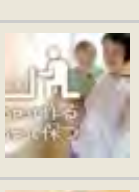
2017年6月30日
気候風土適応住宅のススメ

2017年6月3日
掛川総会３

2017年5月31日
掛川総会２

人気のある記事


伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！
18件のビュー

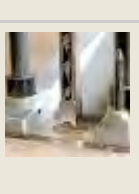

家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ
15件のビュー

設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家
10件のビュー

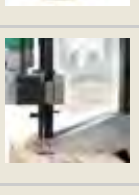
工務店・小田貴之さん（オダエ務店）：木の家づくりのプロデューサー
8件のビュー

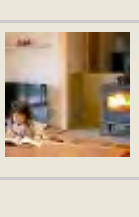
サツキとメイと私の家：愛・地球博レポート
5件のビュー

家にお風呂が入るまで
5件のビュー


無くなっては困る！刻み用電動工具：込み栓角ノミを復活させるためのアクション
5件のビュー

日本人の暮らしと木
4件のビュー


込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記
4件のビュー


改正省エネ法で、土壁はどうなる？
3件のビュー

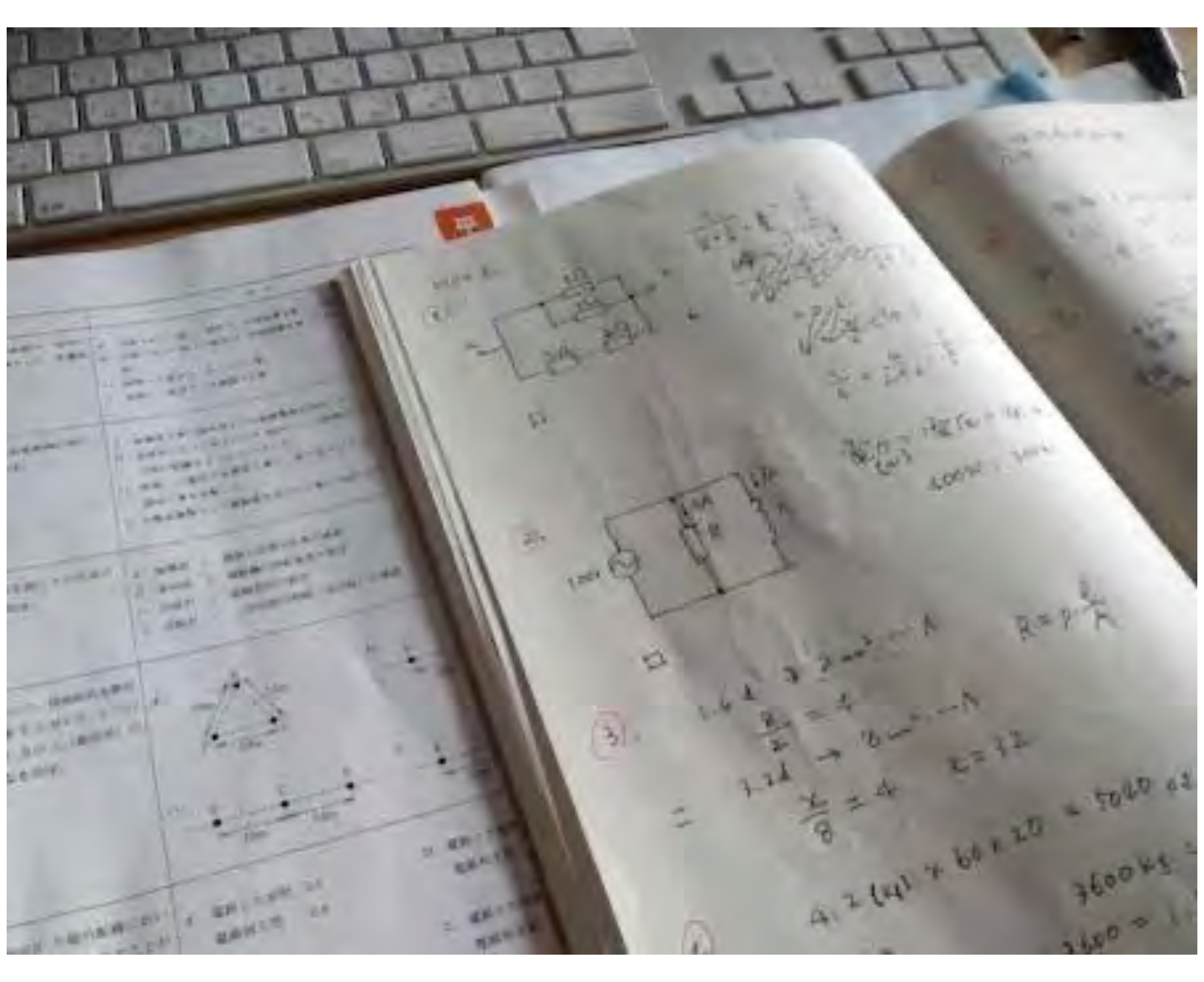
この記事のタグ
大工以外の職人たち
木の家の暮らしと子育て

同じタグがついた別の記事
2015年9月15日
里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）
2004年10月25日
NPO関善賑わい屋敷・曳家工事：この家が動く！
2010年7月28日
きらくなたてものやチーム：家づくりを自分の手に！
2006年9月1日
道具と大工
2012年11月30日
第12期木の家ネット総会 栃木大会

りできるプランニングを心がけています。壁には、室温や湿度をやんわりと調節してくれる土壁を塗り、障子一枚でやわらかい光を取り入れたり、木製雨戸やガラリ戸で暑さ寒さを和らげたりする。そんな家がちょうどいいんじゃないかなと思っています。不思議と、私に設計を依頼してくださる建て主さんは「クーラーが苦手なの」という方が多く、そんな私の「加減」を好んでくださいます。エアコンは設置してもよほどの時以外は使われない方が多いですね。家とライフスタイルとの間に相関関係があるような気がします。

ライフスタイルの尊重

省エネを進めるために守らなければならない基準が作られようとしていますが「室温は何度以上」「家じゅうに温度差がないように」「エアコンをつけない場合でもつけると想定して計算」というような考え方は、どうかと思います。どのような温熱感で暮らすかは、ライフスタイルに関わることです。そもそも、省エネを建物や設備の性能だけで達成させようとすることに、疑問を感じます。それによって、伝統的な構法の建築がつくれなくなるようなことや、簡素に少ないエネルギーで暮らしている人たちまで規制の枠にはめることはあってはならないと思います。



受験勉強に励んでいた時のノート

電気工事士の資格に挑戦

最近、電気工事のできる資格取得をめざしました。筆記試験はどうにか通過、あと実技の結果発表を待っているところです。以前から、消費エネルギーが少なくて済むような暮らしをサポートできる家を作りたいと思っていました。太陽光発電を導入する場合でも、電力会社への売電でなく建て主さんが「自分の屋根で作ったものはまずは自分で使う」ことを希望した場合に対応することも視野に入れて、パネルや蓄電池の配線もできたらいいなあ、と思ったんです。そういう夢の部分で意気投合できる建て主さんに巡り会えたら、楽しいし、そんな時に実現できる自分でありたいですからね！ それに現場の職人さんたちが羨ましいなと思うことも多くて、私にもひとつぐらい、現場で手を動かしてできることが欲しかった！というのもありますね。

つなが～るズの４人、左から神田雅子さん、濱田ゆかりさん、林美樹、平山友子さんです。写真は「ロハスデザインアワード」に出展した時のもの。つなが～るズで、第９回ロハスデザイン大賞2014で大賞を受賞しました。

つなが～るズ

2013年に「くさる家に住む。」というヘンな題名の本を共著で出し、建築女子４人でいろいろな活動を始めました。４人が集まったのは「便利な設備が整った工夫にあふれた家が、傷まないで長持ちする家が、本当に『いい家』なのだろうか」「世の中、私たちが思う方向と違うところに向かっているみたい」という疑問や不満。そこから始まって「人が人らしく生きられる家や暮らし」や『小さいエネルギーで暮らせる方法』などを、４人のネットワークを活かしながら探っています。布草履の作り方や、草木染めワークショップなどの手仕事講座や街歩きを開催し、今後も小さな太陽光発電パネルつくりのワークショップや「小さいエコをシェアしよう」という『エココンテスト』の開催等を目論んでいますので、どうぞご期待下さい！

Like 0　ポスト

1 2 3

ぐらと寅次郎

関連する記事はこちら

きらくなたてものやチーム：家づくりを自分の手に！

里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

漆職人・小林広幸さん(春野屋漆器工房)：木の家づくりにも関わる漆塗り職人を訪ねて

大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

設計士・古川保さん(古川設計室)：木の家づくりは仕組みづくり

職人がつくる木と土の家
ストゥディオ・プラナ
Studio PRANA
林 美樹さん

左から大工の都倉さん、左官の江原さん、建具職人の新井さんに、林美樹さん

1　2　3

Like 0　ポスト

2013年11月、完成間近の「吉祥寺の家」に、美樹さんチームの施工現場を訪ねました。

吉祥寺東町の家

（林美樹さん）　自分で設計事務所始めて良かったなあと思うのは「仕事してくれる人を、自分で選んで声かけできる」ということ。すごい特典だと思ってます！

美樹さん、なんだか、バンドのリーダーみたいですね。

ところが、一般的には、設計者は工務店に下職の手配まで含めて依頼してしまうことが多いんですよ。勿論、工務店さんとしてはいつもの下職さんの方が仕事しやすいということはあるけれど、そういうやり方だと設計者と各職種の人とは、直接につながれませんし、直接打ち合せも出来ません。

元請けとなる工務店から下請けに出す各職方さんのことを「下職」と言う、その言い方からして、いかにも、つながらない感じですよね。上から下に仕事が流れていくやり方だと、下流部分は辻褄合わせをさせられる形になりがちです。

工務店さんにもよるかもしれませんが、通常は各職種に仕事を振る。振られた方は「ここ、やりにくいけど、ま、こう納めておくか」という感じで仕事をするわけです。それでも成り立つかもしれないけれど、仕事する方も自分の仕事に誇りをもてて、最終的に喜んでもらえる方がうれしいじゃないですか！

「本当はこうじゃない方がいいんだけど」の「本当は」の部分から、いっしょに考えよう、むしろ、お互いができるベストを持ち寄ろう！というのが、美樹さんのスタイルなんですね。

ひとりひとりが知恵や技能を持っているプロなわけだから、建て主さんと話して、プランがまとまってきたら、私が考えたことをみんなにまずオープンにして「どうやったら、これ、できる？」と訊いてしまうことにしています。

バンドでいえば、パートを演奏してもらうのでなく、曲づくりから一緒に手がける感じですね。基本設計の時期からチームを召集しておくと、スケジュール調整もしやすいですよね？

左から、大工棟梁の都倉孝治さん（町家大工 都倉）、左官職の江原久紀さん（江原官塑）、建具職の新井正さん（杢正）、

いつ頃まで刻みで、建前でそのあと、小舞をいつ編んで、土つけて・・と、お互いの予定が有機的にからんできますから、スケジュールは早めから擦り合わせできているに越したことはありません。ほかにどんな仕事がいつ頃入ってくるというような状況も分かれば、融通し合ったりと、気心も通じますしね。お金の面でも、予算調整するのに、たとえば土壁の一部おとすとしたら、どこをどうしようか、などという相談などもしやすいです。

やりたいことを積み上げていけば予算は膨らむ一方だから、そこを現実におさめていくための調整や工夫は、大切な工程ですよね。

基本プランの段階で何を大事にするか、優先順位をつけながら、実現可能性やよりよくするための工夫を、いっしょに考えてもらいます。あ、これはもちろんお施主さんも含めての話ですけど。

吉祥寺東町の家の内観。階段ホールの壁や、玄関の大津磨きなど、左官仕事の見せ場が多い。

最初から決まっていることを「やってくれ」というより、よりよい方向にまとまりそうです。

楽しいのは、それぞれの職人さんには、私のもっていないノウハウや発想があるということです。それをなるべく生かす方向で、よりよくしていくことが、自分のための勉強にもなっているんです。

メンバーそれぞれがアイデアや技量をフルに発揮できて、かつ、それがお互いの蓄積にもなっていく現場って、楽しいでしょうね。

イヤな人とはシゴトしたくないのは当然。かといって、指定どおりにちゃんとしたシゴトをしてもらえれば、それでいいの？ と思うんですよ。やってくれる職人さんひとりひとりがもっと主体的に楽しんでくれれば、よりよい結果が生まれるはずでしょ？

なるほどね〜

そうなんです。私が描く基本の図面に記されていないことって、たくさんあるんですよ。各部の取り合い、納まりもそうですが、材質をどうするか、色味は、仕上げは・・と無数の選択肢が実際には、ある。私の方で指定しきってしまうよりは、ぼんやりと「こう思ってるんだけど、どうかな」と投げかけた方が、私の想像を越えた、より面白い答が出てくるんですよね、このメンバーだと。

木部と左官の納まり。大工の都倉さんと左官の江原さんとで前もってキッチリ打合せしているからこその、この仕上がり。

木の家ネットのある設計士さんが「そうかあ。美樹さんを見習って、細かいところまで描くのやめよう！」と言っていましたヨ

もちろん、私だって、一生懸命、考えているんですよ！すべてお任せにしている訳ではないです。けれど、その自分の考えにこだわりすぎない。よりよいものが出れば、そちらを採用する。そのへんを楽しむのが、私の現場との付き合い方かな。

意外な答えが出て来たり？

江原さんの左官の問題について、大工の都倉さんから提案があったり、そっちでそうするんだったら、こっちでもこうしよう、みたいな連携するアイデアが出たり。お互いがお互いの持ち味や技量を分かっているからこそですね。

刺激的ですね〜

図面上では同じようであっても、そういった素材や仕上げの選定で、出来上がりの表情や雰囲気がガラッとが変わるんでしょうね。

この現場では、和室の天井の竿縁をどうしようかというのが、決まらなくて。一応、桜材で、と決めていたのですが、良い材料が見つからず、しかもなんか現場が気乗りしていなくて。（笑）その時、「ウェンジ材（黒檀のような茶褐色の南洋材）でどうでしょう」と提案してくれたのは、新井さんでした。「それだったら、床柱も素材を合わせて、丸でなくて角柱でいきますか。」と都倉さんからも提案があり、天井の竿縁の間に貼る和紙は私が選び、左官仕上げが決まり、襖の色がきまるといった具合でした。

新井さん提案の和室の竿縁と揃えた、ウエンジ材の床柱。一本ものに見せるための新井さんの隠し技が。

じつは、このメンバーは、みんなお茶を習っているんですよ。

へえ。それは、それは！

理屈ではなく、感覚的なところがありますからね。ルールやしきたりに縛られるのでなく、ある美学に則った取り合わせの妙の感覚を養うのに、お茶は役に立ちますよ。出来上がりを真・行・草のどのあたりに設定するのかなどといった、共通の見方をみんなが持っているのも、強みかもしれません。

いやあ、楽しんでいますね！

職人がつくる、木と土の家
私たちがつくっています。
設計監理：Studio PRANA（林 美樹）
工事総括：町家大工都倉（都倉孝治）
03-3932-8313

最近は現場に「職人がつくる、木と土の家」という看板を立てるようにしている。

メンバー紹介

都倉さんは、私が独立して最初に手がけた住宅を施工してくれた大工さん。私が書いた図面が貫工法で、請け負った工務店出入りの大工さんが、「自分じゃこれはできないから」ということで、東京の若い大工さんの会（匠技能研究会）の代表をしていた都倉さんを紹介したというのが馴れ初めです。すばらしいシゴトしてくださったので、それ以来、木工事は都倉さんを指名したり、最近では元請けになって頂いています。

都倉さんと鉄骨屋さんとでコラボレーションしたスチールの手摺のディテール

太鼓梁もさりげなく。ひとつひとつの材料を丁寧に組みあげる都倉さんの仕事。

掘り炬燵の櫓。指物もこんな具合に。建具屋さんの作業場で仕事することも。

江原さんとは、父の前橋の現場を担当した、群馬の名左官職人、高木さんのところで修業していた時に知り合いました。後から話を聞くと、左官になりたい！と言って、私の父に弟子入り先を紹介してもらったらしいです。江原さんは、高木親方譲りで研究心旺盛。新しいことにトライする心をもっています。「できない」とは絶対に言わない人です。いずれいっしょに仕事したいなあ、と思っていたところ、独立して土壁の仕事もやっていると聞き、早速声をかけました。

顔料を調合して、大津壁の準備中

取材当日、江原さんは玄関に仕上げる大津壁の色見本をつくっていた。

新井さんは、江原さんが「なかなかの建具屋がいるんです」と行って、連れて来てくれたのですが、左官屋さんが建具屋さんを紹介するっていうこと自体が、おもしろいでしょう？ 新井さんも研究熱心ですよ。ひとつ質問すると答えが10くらい還って来ます。建具職人ならぬ、建具博士と呼びたくなります。左官や大工との調整をとことんして、様々な工夫をし、提案をしてくれます。決して主張しすぎず、それでいて存在感のある、空間に調和する魅力的な建具を黙っていてもつくってくれる方です。

鴨居のない引戸を受ける金具。引戸の天端が、この小さな金具の間をスーッと通っていくという納まり。都倉さんと新井さんの工夫で実現。

メンバーより

（都倉さん）　設計者、大工、左官、建具。誰が上、ということがない互いの技を尊重しながら進められます。

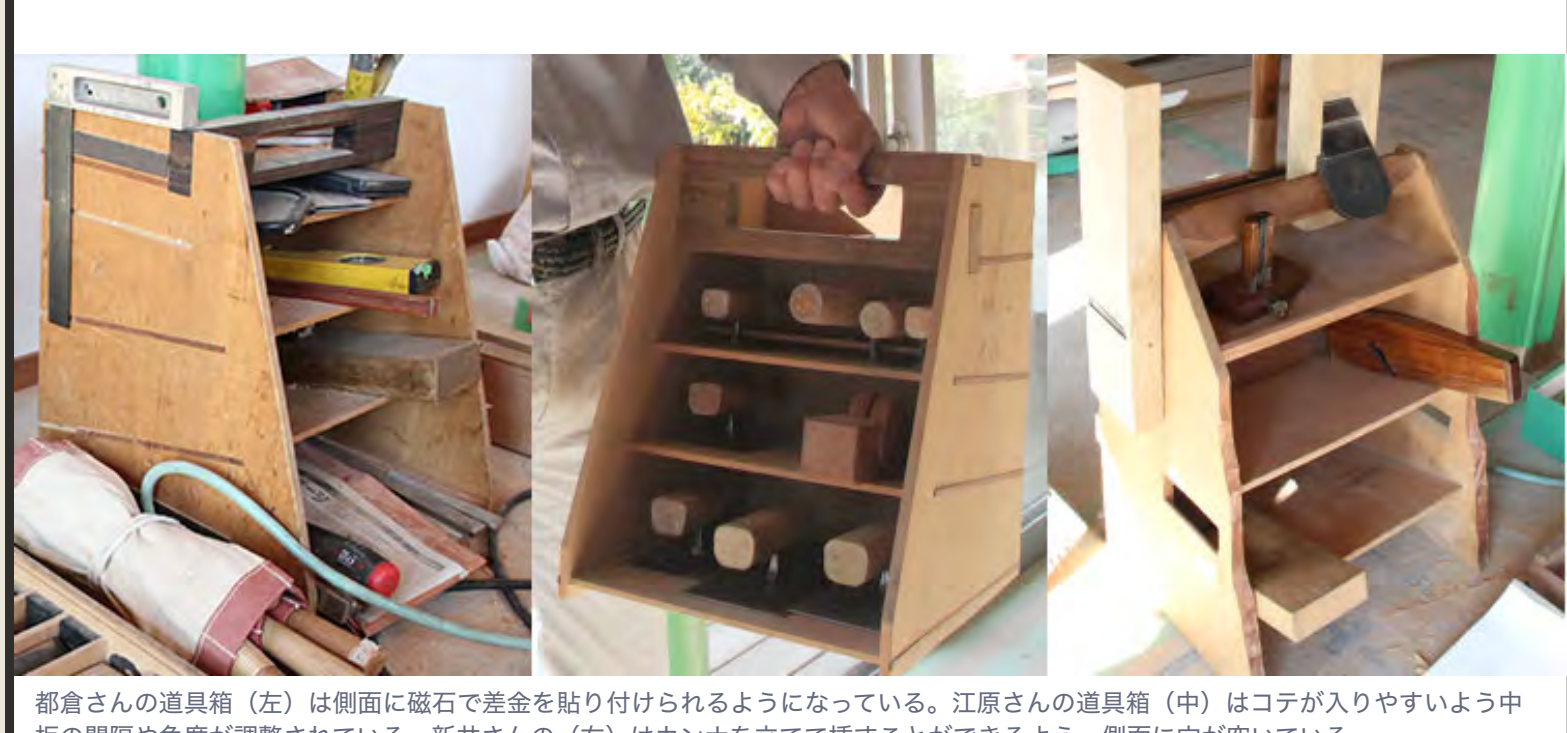
（江原さん）　美樹さんの仕事は自由度が高いから、いくらでも工夫の余地がある。「こんなの、どうですか？」って、思い切った提案しても、けっこう採用されたりして。おもしろいでですよ！

（新井さん）建具屋って、大概、最後に声がかかるものですが、基本設計の段階から声をかけてもらえるから、決まってないところは知恵を出し合って練り上げていく楽しさがありますね。

家づくりのチームは、この３人と私だけでなく、他の様々な職人さんや建て主さんも加えて初めて成り立っています。建て主さんがお金を払っているのだから立場が上ということもなければ、私たちがプロで建て主さんは素人なんだから、ということもなく、関係性は対等です。お互いに思うこと、やれること、できないことなどを出し合って、よりよい家づくりを目指したいと思っています。

取材後記

現場を取材中、気になったのが、三人が持っていた三人三様の道具箱。現場でよく使うものをコンパクトに収納できる、それぞれの自作のものです。似ているんだけれど、それぞれがちょっとずつ、違う。

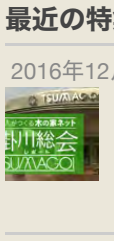


都倉さんの道具箱（左）は側面に磁石で差金を貼り付けられるようになっている。江原さんの道具箱（中）はコテが入りやすいよう中板の間隔や角度が調整されている。新井さんの（右）はカンナを立てて挿すことができるよう、側面に穴が空いている。

最初、都倉さんが自作の道具箱を使っていたのをみて、江原さんと新井さんがそれぞれ自分なりに工夫してつくったそうです。そのようにして出来上がった江原さんの道具箱を見た都倉さんが、「あ、それいいなあ」と言ったら、実はもっと改良したかった江原さんは、惜しげもなく都倉さんに譲ってしまいま

木の家イベントカレンダー

最近の特集記事


2016年12月23日
掛川総会

2016年8月2日
込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記

2016年6月21日
熊本震災レポート 2

2016年6月9日
大工たちによる「家戻し」の記録

2016年5月21日
熊本震災調査レポート

2016年4月28日
古川 保の熊本市川尻町 震災日誌

2016年3月31日
2/16 衆議院第二議員会館 調査報告会レポート

2016年1月27日
地域型住宅の省エネルギーを探る 〜2016.1.17 京都フォラム報告

2016年1月14日
第15期 木の家ネット総会 高知大会 〜会員発表篇〜

2015年11月13日
工務店・小田貴之さん（オダ工務店）：木の家づくりのプロデューサー

人気のある記事

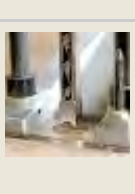
伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！
18件のビュー

家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ
15件のビュー

設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家
10件のビュー

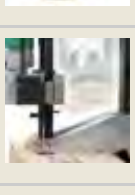
工務店・小田貴之さん（オダ工務店）：木の家づくりのプロデューサー
8件のビュー

家にお風呂が入るまで
5件のビュー


無くなっては困る！刻み用電動工具：込み栓角ノミを復活させるためのアクション
5件のビュー

サツキとメイと私の家：愛・地球博レポート
5件のビュー

日本人の暮らしと木
4件のビュー


込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記
4件のビュー

大工と左官の職人プロジェクトチーム 総合建築植田 植田俊彦さん 俊司さん
3件のビュー

この記事のタグ

大工以外の職人たち
木の家の暮らしと子育て

同じタグがついた別の記事

2016年8月2日
込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記

2012年11月30日
第12期木の家ネット総会 栃木大会

2009年2月26日
漆職人・小林広幸さん(春野屋漆器工房)：木の家づくりにも関わる漆塗り職人を訪ねて

2007年9月27日
大工・金田克彦さん(大┘ (だいかね)建築)：幸せをつくる大工

2010年7月28日
きらくなたてものやチーム：家づくりを自分の手に！

した。そして、次のバージョンの制作。譲り受けた都倉さんも、自分流にアレンジ。

「せまい現場でもひょいと持っていける道具箱」というザックリした用途は一緒でも、使う道具の種類、こだわるポイント、好みなどで、少しずつ違う。そして、機能的なだけでなく、どれも美しい！ 三人がそれぞれの「用の美」を追求している感じが、楽しいです。

伝統構法の家づくりの真髄は「手づくり」「その現場現場に応じる工夫」にあります。建て主さん家族のために、その場所や素材を生かすために、ひとつひとつが「一点もの」です。それを生むのは、ひとりひとりの職人さんの心意気と手の技。頭を使い、手をかけてする仕事にあらわれる、閃きや冴えが、その家にしかない価値を生み出します。メンバーが楽しく力を発揮できるような形にまとめている美樹さんがいてこそのチームであり、この三人の仕事があってこそ、美樹さんの作る家だなということを実感しました。

Like 0　ポスト

1 2 3

関連する記事はこちら

きらくなたてものやチーム：家づくりを自分の手に！

里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

漆職人・小林広幸さん(春野屋漆器工房)：木の家づくりにも関わる漆塗り職人を訪ねて

大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

設計士・古川保さん(古川設計室)：木の家づくりは仕組みづくり